

---

# 〇シリーズ

三谷尾だま

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

シリアーズ

### 【ZPDF】

Z3389BA

### 【作者名】

三谷尾だま

### 【あらすじ】

毎回、どこかにキュラソーさんが出てくる、結局、何なのかよく解らないシリアーズ。それぞれの話は読み切りで、あらすじと傾向は各冒頭にあります。どの話からでも読めます。すつきりしない話ばかりなので、曖昧な終わり方が嫌だと読みづらいと思われます。

現在、以前ブログに載せて了一編しかないため、そのあとどうあえず完結表示にしておきます。

## マーガリート幻想・前編（前書き）

この作品は、PG12程度です、約3,700字。あらすじ：私は、戻つてこない夫を待ち、日に日にやつれしていくマギーを心配していた。買い物の帰りに、ある男性にぶつかり……。キーワード：殺人事件

私は、庭弄りの手を止め、額の汗を拭つた。花壇の雑草を引き抜いたときにかかつたであろう土を、白い花びらから払つた。たくさんのマーガリートが、花壇には咲いている。

ゆつくりと立ち上がり、抜いた雑草を入れていたバキットを隅に寄せた。花壇は作業を始めるまえよりも明らかに片付き、私は少しの満足感を思える。

休憩をしようと、作業用の手袋を外してスカートの裾を払う。手を洗つていると背後から人の気配がした。振り向けば、彼女が立つていた。

「わたし、もう駄目だわ！ あの人は今日も帰つてこない。きっと、わたしのことが嫌になつたのよ」泣きながら彼女は言つ。

「そんなことはないわ、マギー。彼は、きっと帰つてくるわよ」私は、そう言つて彼女を慰めた。

「でも……、もう彼が帰つてこなくなつて一週間も経つの?」

「捜索願は出したのでしよう？ 警察が見付けてくれるわ

それから、夫が失踪したといつて取り乱している彼女の、もう何度も目かになる話を聞いて、相槌をついて励ます。どうにか彼女は落ち着きを取り戻し、しきりに涙を拭いていた。

「そんなに落ち込んでばかりでは駄目だわ。そう、これから一緒に

お茶の時間にしましょう、ね？」

「でも……、そんな気分じやないわ。気が気じやなくて」

「だからよ。一緒にケーキでも焼きましょう。そうしたら、きっと気分も紛れるわ。私、材料を買つてくるから、貴女、準備をして頂戴な」

上手く彼女を宥めると、彼女も少し乗り気になつたようで、無言で頷き、準備をするために彼女の家の方に歩いていった。彼女の家には、性能の良いアブンがあつた。

私は溜息を一つ吐き、玄関の棚からハサミを取つて、花壇に咲いているマーガリートをメインに、いくつかの花を切つた。それを持って台所へ行き、花瓶に活けると見栄えをチェックする。上出来だった。

冷蔵庫の中と棚を見て、在庫を確認して財布の入つた小さな鞄を手に取る。買い物が終わつたあとでマギーの家に持つていこうと、花瓶は玄関の靴箱の上に置いて家を出た。出がけに彼女の家を見る。この位置からは、彼女の姿は見えなかつた。

どんなケーキを作らうかと道すがらに考え、やはりここは、気取らずクリームティが良いかもしけないとつた。クロテッドクリームはある。スコンを作れば良い。

紅茶は彼女の家にあるだらう。そうだ、そうしよう。

ほとんどの材料は、既に揃つてゐるよつたので、なにかおいしそうな果物でもないかと、青果コーナーを眺めた。赤い、ラズベリ

イがとてもおいしそうだ。この間、買ったばかりのおいしいストロベリージャムを出そう、と考えてはいたが、そのラズベリイがありにもおいしそうだったので一盛り購入した。

ほかにも夕食用の材料をいくつか購入し、早々に店を出る。

一人でお茶を飲んだあとに、夕食も一緒にしよう。可哀相なマギー。あんなにやつれてしまつて、ちゃんと食事を摂つていないに違いないだろう。

私は家路を急いだ。

家の近くで、私は男性にぶつかる。よくは覚えていないが、たしか、あちらが飛び出してきたようだった。

私は小さな悲鳴をあげる。

「すみません。大丈夫ですか？」

申し訳なさそうに謝る彼を見上げた。黒い髪に眼鏡をかけており、何だか頼りなさそうな感じにも見える。大事に胸に抱えていた紙袋を見ると、一番上に載せていたラズベリイが少し潰れていた。

「はい……、大丈夫です」酷くガツカリした声で答える。

「ああ、これ、潰れてしましましたね。すぐに新しいもの、買つてしましょうか？」

「いえ、『心配には……』そこで私は、彼の胸元に広がるものを見付けた。『まあ……！』

「え？」

不思議そうに自分の胸元を見た彼は、そこに赤いラズベリイの染みを見付け、苦笑いをする。ぶつかってきた彼が自業自得とも言えるが、服に染みをつけてしまったという点では、私に非があるのでうづ。

「大変……。早くしないと、取れなくなってしまいますわ。私の家が近くですの。今からいらして下さいませ」びっくりしている彼の袖を引っ張った。

「いえ、これくらいの染み、洗つてもうえは取れますよ」

「時間が経つと、取れなくなってしまいますわ。さあ、こちひく」

困っているらしい彼を連れて、私は歩き始める。そこへ脇道から帽子を口深に被った少年がひょいと現れ、男性の横に並んだ。

「なに? どうかしたの?」

「ちゅうと、染みが……」男性の答えだけでは意味が分からなかつたようで、少年は首を傾げる。

「ほんのすぐ、近くですか。ところで、お一人でお買い物ですか?」

「ああ……いえ、仕事の帰りです」男性が答える。少年は黙つてついて来ていた。

「仕事……、どのよくな? あら、不躾な質問でしたかしら」

「構いません。医師、ですよ」

私は改めて彼の顔を見る。確かに、こんな風貌の医者はいそうである。威圧的な雰囲気ではないので、気軽に相談はしやすそうのかもしれない。

気が付くと、私の家までたどり着いていた。

「……」です。ああ、早く染みをどうにかしなくてはいけませんね  
「染み?」少年が不思議そうに男性を見る。そして、やっと胸元の染みに気付いたようだ。いきなり笑い始めた。「相変わらず、間抜けだなあ」「

男性は眉をしかめ、少年の被っている帽子のツバをすこんと叩いた。帽子が落ちる、彼の顔がはつきりと見えた。彼は慌てて帽子を広い、再び目深に被る。

「まるで血がついているみたいだね」少年は微笑んだ。私は、その微笑が怖かった。

「上着を、脱いで下さいますか?」玄関を開けて、荷物を置くと私は言つ。

「染み抜きなんてしなくて、大丈夫だよ。ほら」

少年が男性の胸元の染みを一撫ですると、そこにはもう、染みは見当たらない。幻でも見たのではないけど、何度も瞬いた。

「……あー、ここは貴女の庭ですか? 綺麗ですね、あの花とか」その場を取り繕うかのように、男性が不自然に庭を褒める。

「ええ。私、マーガリートが大好きですの」

「マーガリート……、ああ、アルギランセマムね。僕も好きだよ」そう言って、少年は花壇に近付く。

白いマーガリートが並ぶ花壇を、彼は少し悲しそうな表情で眺めながら歩いていた。そして、ある地点で立ち止まる。

「あ……」私は思わず手を伸ばして、引っ込めた。

「どうか……されましたか？」

「いえ、その辺りは最近、植え付けたばかりでして。堆肥が少し、臭いますでしょ？」

「確かにここ、嫌な臭いがするね」少年は、花壇の隅にある、薔薇らついていない一群を横目に見た。

少年は花を見るのを止め、男性に近付き、ぼそぼそと耳元で何かを囁く。きっと、早く帰りたいとも言っているのではないだろうか。

私は、マギーとお茶を飲む約束をしていたことを思い出す。可哀相に彼女は、待ちくたびれてしまっているだろう。俄かにそわそわし始めてきた。

「あの、私、友人とお茶の時間を楽しむ約束をしていますの……」  
続けて、染みのことを口にしようとしたが、染みが消えてしまったあの現象を口にするのは憚られた。

「ううううしていると後ろから声がかかつた。

「あら、帰っていたのね。わたし、あなたまで帰つてこなくなつてしまつたのかと思ったわ。その方たち、お客様なの？」

隣か隣マギーが顔を出す。少年は好奇心旺盛な目を彼女に向けた。

「貴女まで、といふことは、他に誰かがいなくなつたの？」

少年がした質問は、マギーを震え上がらせた。私は慌てて彼女を家に押しやる。

「マギーの夫が行方不明なのですわ。彼女は深く傷付いております。そつとしておいてやつて下さいな。では、私も用意がありますので、失礼致しますわ」

そそくさと部屋の中に入つてしまつと、台所へ行つて、持つていくものの準備をした。ジャムやクリーム、潰れてしまつたラズベリイなどをバスケットに詰め、腕に提げると両手で花瓶を抱えて外に出て。

すると、まだあの一人組みがそこにいたので、私は驚いた。一緒にお茶を飲みたいのだろうか。

「すみません、もう帰るといひります。最後に、どうしても貴女に言いたいことがあつて……」男性は言いくくそうに、肩を竦める。少年はまた、ぼんやりとマーガリートを眺めていた。

「いいえ、何でしょ、」

「余計なお世話だと思われるかもしれません、早く自首、された方が良いですよ」

私は飛び上がるほど驚いた。

「何のことでしょうか？あの、貴方は一体……？」

精一杯、隠したつもりだったが、体がガタガタ震えて思うように動かない。男性は、やや遠慮気に近付いてきて、名刺を差し出した。そこには『キュラソー事務所』と書かれており、住所と電話番号もあつた。彼は自分が医者だといつていたが、探偵のようなこともやつているのだろうか。

「それでは、失礼します」

それ以上、追及されることもなく、彼らは立ち去つた。去り際に少年が呟いた、マーガリートの花言葉が悲しく私に刺さる。

まさか、私がここにいない間に花壇を掘り返したのだろうか？あのとき、もつと自然な振る舞いを心がけていれば、こんなことにならなかつたのだろうか？　ああ、もつ、後戻りはできないのだ。

倒れるように座り込み、花瓶を抱き締めて泣いた。もつ、耐えることができなかつた。花瓶の中のマーガリートが揺れる。

私は、私は、マーガリートが大好きだつた。

マーガリート幻想く了く  
マーガリート幻想・後編（後書き）

マーガリート幻想く了く

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3389ba/>

---

Cシリーズ

2012年1月8日21時48分発行